

2019 年 4 月～2021 年 3 月 米山奨学生 楊 馳 君



2019 年 4 月から二年間、大変お世話になっておりました、米山奨学生の楊です。

私は博士後期課程に進学してから、研究に打ち込めば打ち込むほど、それ以外の時間が削られていき、経済面でも大変苦勞を強いられます。そんな状況において、米山記念奨学金は私にとってまさに大きな救いとなりました。頂いた奨学金は学費と研究費にあてさせていただき、奨学生として恥じぬようより一層勉学に励みました。おかげで、無事博士論文を提出し、博士号を修得しました。もちろん、経済面だけではなく、ロータリークラブは、私にとって、自分の世界観・視野を広げ、ネットワークを強くし、社会奉仕への責任感を持たせてくれた大事な存在です。2年間の奨学生生活で、豊中ロータリークラブの活動や、ロータリー米山記念奨学会の活動にたくさん参加させて頂きました。皆様との交流を通して、日本の文化・習慣などに触れることができました。岩本会長をはじめ、多くの方々にお世話になりました。また、同じく豊中 RC の奨学生のサムさん、李さんとママヒットさんと仲良くさせて頂き、この2年間は私にとって人生の宝物です。

私は 3 月学校を卒業すると共に、日本での留学生活に終止符を打ち、中国に帰国することになります。そして、9 月から、中国の大学の日本語教員となります。米山奨学生に応募した際に、提出した小論文に、将来の計画についてこのようなことを書きました。「日本で勉強した知識や経験を生かし、微力ながら日本のために、中国のために貢献し、日中友好の架け橋になりたいです」。新型コロナウイルス感染症の余波が続く中、日本や世界各国が、発源地とみられる中国に対する見方はまた大きく変わるでしょう。また、コロナに関する情報だけでなく、夥しい数の情報が日々われわれに押し寄せてきている今、もし学生が日本語という道具を手に入れれば、違う視点で総合的に考慮し、判断することが可能と考えて、教師を志しました。日本語というツールを提供することで、中国の学生をより広い視野で、客観的に日本、また日本との関係を捉えることができれば幸いと考えております。日本と中国には様々な問題が存在しておりますが、今の近くて遠い国から、近くてさらに近い国に変身させたいと考えております。

最後になりましたが、様々な面で支えて頂きましたロータリーの皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。また、豊中ロータリークラブのさらなるのご発展を願い、そして皆様方の益々のご健康とご活躍を祈り、謝辞とさせていただきます。

ありがとうございました。



「日中における近代語彙の形成と交流」

米山奨学生：楊 馳

日本語では漢字語が語彙全体の5割を占めています。中国は無論漢字の国で、表記は漢字だけです。現在、あるいは歴史的に漢字を使用したことにより、日本語と中国語において同じ漢字で表記する語が数多く存在しています。このような語を「同形語」と読んでいます。大学、知識、国家、国会などは同形語の例です。現在、漢字の字体には、中国では簡体字、日本では新字体とそれぞれ違いも生じていますが、今の活字の字体の元に遡ると、同じ漢字が使われることとなります。

同形語の由来ですが、日本語には中国の古典にある言葉がたくさんあります。そして日本で作られた漢字語、いわゆる「和製漢語」もたくさんあります。江戸中期以降、特に明治時代に入ってから、新しい漢字語がたくさん作られてきて、このような言葉は国語学界では「新漢語」と呼ばれています。なぜ、このような新漢語が作られたかですが、親漢語は西洋からの新しい概念を取り入れるためのもので、意味的特徴としては、抽象語彙、あるいは学術用語という色彩が非常に強いのです。ただし、教育の普及に従い、当時難しい学術用語も今では日常的なことばとして使われるようになりました。

では、なぜ同形語が存在するかといいますと、古典語に関しては、中国の古典から借用したことで説明がつかます。中国の典籍になかった語はどうでしょう。可能性としては、中国と日本それぞれ漢字を使いますので、言葉を作る際、偶然に同じ言葉ができてしまうことが考えられます。しかし、同形語は夥しい数にのぼっているのです、とても偶然の一致では片付けられません。日中の間では大体2000語くらいの同形語が日常的に使われています。そのうち半分前後が中国の古典に存在しないため、全てが偶然にできているとは考えにくいでしょう。事実として、日本は新しい漢語の創出に大きく貢献したので、中国と日本は新しい漢字語の作り手です。言葉には1つの宿命がありまして、作られた言葉は必ず定着するとは限りません。日本では毎年、流行語大賞で話題になった言葉、残ったのはかなり少ないでしょう。そのようなことがあるので、新漢語も言語社会に如何に受け入れられたかが大きな問題になります。このように、漢字、同形語、新漢語に関しては、次のようなことが考えられます。1つは作り出すこと、もう1つは交流によって、漢字文化圏に拡散し、定着するということです。

今日は共創・共有の側面についてお話したいと思います。

では、いつから、新しい漢字語が作られるようになったのでしょうか。16世紀以降、大航海時代の知識の移動に関しては「西学東漸（せいがくとうぜん）」という表現があります。西洋の学問が東洋にやってくるという意味です。その時期、大量のイエズス会士が布教のため中国にやってきました。もちろん日本にも足を踏み入れましたが、当時の日本の学問は中国から伝わってきたものに気づいたので、関心は中国に向き始めました。イエズス会の布教方針の特徴として、適応政策です。つまり中国のような古い文化・文明を持っている国に対し、現地の文化を尊重しながら、布教活動を勧めていく政策です。その内容の1つは翻訳です。宗教の書物だけでなく、西洋の知識が分かるような書物も翻訳しました。この経緯で翻訳された書物は前期洋学書と呼ばれています。内容的には世界地理、外国事情、天文学（てんもんがく）、数学などあります。

しかし、中国では 1720 年代からキリスト教の布教が禁じられるようになり、宣教師は海外に追放され、公に中国での活用が禁じられました。再び中国に足を踏み入れるのは 1807 年、プロテスタントの宣教師モリソンが広州に上陸したのです。百年近くの断絶を経ました。プロテスタントの宣教師たちも数多くの書物を翻訳した。特にアヘン戦争後、翻訳・出版が活発になりました。先ほど述べました前期洋学書に対して、これらは後期洋学書と言います。後期洋学書に作られた言葉は次のようなものがあります。また、中国の人文科学の用語は非常に遅れていました。実学のほうはいろいろありましたが、哲学を始め、人文学のことば皆無に近い状態です。以上で、中国での新語創造の状況について簡単にご説明いたしました。

次は日本を見ていきたいと思います。日本では意識的な漢字語創作は、江戸中期の蘭学からとされています。いわゆる蘭学は、オランダ語による西洋の新しい知識の取り入れです、蘭学者はまず用語の問題に出会います。本格的な新語創作は、1774 年に公刊された『解体新書』からでした。ご存知の通り、『解体新書』は最初のオランダ語の翻訳書です。漢籍や漢方の用語はもうそれだけでは足りません。では、なぜ漢字で新語を作らなければならないのかという疑問が湧き出します。1 つは、当時漢文が東アジアにおいて唯一の書記言語、学術言語だからです。もう 1 つは、漢字語の簡潔さと造語力に関係します。複雑な概念なら和語が長くなります、そして和語は圧縮がききません。例えば、「大阪大学」は「はんだい」と言います、「文部科学省」は「もんかしょう」と略称できます。

では、新語はどのように作られたのでしょうか。杉田玄白は『解体新書』巻頭に次のように記しています。訳語には3種類あります。1つは「翻訳」、漢籍にある由緒正しい言葉を訳語として用いることです。2つ目は「義訳」、漢籍の言葉が見つからない時、別途訳語を造ることです。義訳は新語を造ることに繋がります。蘭学の場合、よく逐語訳が用いられます。オランダ語では、1つの単語はそれぞれの意味に分解することが可能で、各部分に漢字を当てていくことにより、新しい語ができるわけです。杉田は「軟骨」の例をあげました。もとのオランダ語は、「やわらかい」と「ほね」の2つの部分からなります、そこへ、「やわらかい」に「軟」という字を当て、「ほね」に「骨」という字をあてると、「軟骨」ができました。「十二指腸」もそういった仕組みです。「神経」は違って、原語は単純語であり、意味のあるパーツに分解できません。そのため、いろいろ思案を巡らせ、その役割や機能を考えながら、原語の意味を端的に表せる語を考案しなければなりません。「脂肪」は中国古典では動物のことを言う言葉ですが、蘭学では、その意味を、人間を含む生物体まで拡大しました。また、蘭学者は漢字による新しい複合語だけでなく、新しい漢字も作りました。まれな例として、「腺」という字があります。にくづきに泉、生物の体内で液を分泌する器官という意味を表します。最後の3つ目は「直訳」です、発音を写す。

蘭学は幕末まで続き、その造語法がそのまま明治の啓蒙者に継承されました。彼らは蘭学を訳語創出法の英語の書物の翻訳に使いました。一番の原則はできるだけ漢籍語を使うこと、例えば、「革命」、中国語ではもともと王朝が交代することを意味したが、revolution の訳語にあてられ、現在にいたっています。次に、漢籍にない場合は、新語を作ります。例えば西周は「哲学」ということばを作りました。加藤弘之は「進化」という言葉を作ったのです。そして、やむを得ず音訳語を使用する場合でも、仮名ではなく、漢字で表記することです。例えば、「ソーダ」、「クラブ」、「ガス」などがあります。ちなみに、クラブはもともと「苦楽部」、苦しいの「苦」、と訳されていますが、後にこちらの「倶楽部」になりました、苦しいこと、楽しいことより、ともに楽しもうという理由でしょうかね。現代日本語語彙体系が、明治20年頃完成したと言われていています。言文一致運動や日本初の国語辞書『言海』の出版が象徴的なことです。

以下、新漢語がどのようなプロセスを経て、現在我々の使う言葉になったのかについてお話ししたいと思います。かまず中国から日本への流れが考えられます。いわゆる 17~18 世紀のイエズス会士たちの書物。内容は数学、天文学、地理、博物学の分野のものが多いです。その他、中国の古典、仏典、善書などがあります。

中国の禁教政策によって宣教師らの翻訳活動が低迷になり、1842 年のアヘン戦争後、翻訳と出版が再開しました。1859 年から、中国の書物が大量に舶来（はくらい）されました。なぜ 1859 年かといいますと、日米修好通商条約の締結により、横浜港、神戸港などが開港しました。入ってきた書物は後期洋学書、そして英華辞典、新聞雑誌が加わりました。福沢諭吉など当時の知識人はほとんど英華辞書で英語を勉強しました。それから、中国で活躍した西洋の宣教師や中国の商人、外交官や文化人が日本に入ってくるようになりました。有名なヘボンも中国での布教経験をお持ちです。内容から言えば、数学、天文学、地理、博物、医学、化学など広範囲にわたります。当時の世の中の風潮として、漢学崇拜と言われる時代で、漢文を読み、漢詩を作ったりしていました。そして、蘭学の訳語を捨てて中国語の訳語に乗り換えるという訳語の交替の例も数多く発生しました。

1894 年日清戦争が勃発し、中国が負けました。1895 年以降、日本からいわゆる朝鮮半島、台湾、そして中国大陸に、言葉が広がっていく時代が来ました。日本の雑誌、新聞も中国に進出し、当時中国から日本へ派遣した留学生たちも、日本書の翻訳に大活躍しました。19 世紀末、言葉の流れが逆転しました。

中国語では、1 字の在来語に対し、同じ意味の 2 字語（もしくは 2 字語群）を用意すること。「単双相通」（たんそうそうつう）と呼ばれています。1 字語だけで、口頭表現上とても不便です。つまり同音異義語が多すぎて、聞いてすぐ理解してもらえません。日本語の場合は、これまでの和語（大和言葉）に対して漢字語を用意することです。これは「和漢相通」と呼ばれています。現在、辞書を引くと日本と中国とも 2 字語が一番多いです。

今我々が使用している漢字語は、漢字文化圏における「環流」の結果です。中国で造られた語彙が、日本に渡って、日本で新しい学問体系に組み込まれたのち、また中国、朝鮮半島に渡り、共通の言葉になりました。総括として、まず近代における日中語彙交流は、西洋文明の受容を背景に展開された文化事象であるということです。言い換えれば、東洋が如何に西洋を受け入れたかが言語面における現れです。そして、新漢語の創造、移動、普及、定着は、中国や日本、ひいては東アジアの近代に関する記述に繋がります。

「米山記念館訪問報告」

卓話者：楊 馳 米山奨学生

米山梅吉翁は1868年2月4日、大和国高取藩の和田氏の三男として東京に生まれ、父の死後、母の故郷の静岡県長泉（現米山梅吉記念館の所在地）に移り、中学生まで、静岡で過ごしました。1883年16歳の時、静岡県から上京し、働きながら勉学に励みました。1887年、米山家に養子として入籍、同年米国へ渡り、8年間の苦学の留学生活を送りました。帰国後、文筆家を志して勝海舟に師事し、博文館より『提督彼理（ペルリ）』を出版しました。1897年、井上馨の紹介で三井銀行に入社し、三井銀行深川・横浜・大阪各支店長などを経て、1909年、常務取締役役に就任しました。1924年に三井信託株式会社を創立し取締役社長に就任しました。信託業法が制定されると逸早く信託会社を設立して、新分野を開拓し、その目的を”社会への貢献”とするなど、今日でいうフィランソロピー（Philanthropy）の基盤を作りました。晩年は財団法人三井報恩会理事長、三井信託株式会社代表取締役会長、第15回赤十字国際会議日本赤十字代表委員などを歴任し、ハンセン病・結核・癌研究の助成など多くの社会事業・医療事業に奉仕しました。1928年に紺綬褒章受章、1942年に勲四等瑞宝章受章しました。また、子どもの教育のために、はる夫人と共に私財を投じて1937年に財団法人緑岡小学校（現青山学院初等部）を創立し、校長に就任しました。1946年4月28日死去、享年78歳でした。

米山梅吉は日本のロータリーの創始者で、日本ロータリーの父「Father of Rotary in Japan」と称されます。1918年の渡米中、ダラスロータリークラブ（RC）のロータリアンになっていた福島喜三次の紹介により、ロータリークラブと出会いました。そして帰国後の1920年10月、米山梅吉は東京RCを創立し会長に就任しました。幹事は福島喜三次です。米山は1924-26年度国際ロータリー（RI）のスペシャル・コミッショナー、1926-27年度RI理事（日本人初）、1928-31年度第70地区（当時）ガバナーなどを歴任していました。文筆に優れた彼には、ロータリー関係の主な翻訳書に、ポール・ハリスが著した『ロータリーの創設者ポール・ハリス』、『ロータリーの理想と友愛』（原題は『This Rotarian Age』）があります。

三井信託銀行社長当時、米山梅吉が使用していた執務机と椅子、米新入社員の入社祝いに配布した名刺入れなど貴重な展示物も見ました。展示室の見学を終え、3階に上がり、屋上で富士山をバックにみんなで集合写真を撮りました。館内の見学が終わり全員で米山梅吉翁のお墓にお参りをさせて頂きました。

梅吉翁は俳人としても著名な方で、墓碑には「いさかきもなき漫々の青田かな」という歌が記されています。見学の感想として、一つは米山梅吉翁の奉仕の精神に感動しました。「窮すれば則ち独り我が身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす」という孟子の言葉があり、梅吉翁はまさに「達すれば則ち兼ねて天下を善くす」の如き奉仕の偉人であった。そして、今の自分のできる範囲の奉仕活動がきっとあると思います。いまひとつは、繋がりを大事にすることです。見学の最後に行いました、みんなで輪になって手を繋いだ状態で「右手を上げよう」という活動は非常に意義深いものでした。自分は右手を上げていると、隣さんの左手も上げられましたので、みんなと仲良くなり協力すれば万歳のことになると思いました。私もこれから片手では他人を支えていこうと決めました。奨学生として採用されましたからこそ、このような研修旅行に参加することができました。他大学の奨学生とお互いに交流できる場を与えていただき誠にありがとうございました。ご同行くださいましたカウンセラーの宮田先生をはじめ、ロータリクラブの皆様にお礼申しあげたいと思います。